*　　*　　*　　*

コフキカラタチゴケ (*Ramalina intermediella* Vain.) は鳥取県で採集された標本をもとに Vainio (1921) によって記載された樹枝状地衣類で，これまでに日本および台湾の低地に分布することが知られていた。本種は地衣体が基部で密に分枝し長さ 5-10 cm となり，細長い地衣体上に楕円形の粉芽を持つことで特徴づけられる。かつて日本産カラタチゴケ属を研究した朝比奈博士(1939)は，本種にセッカ酸とラマリノール酸が含まれることを明らかにするとともにヨーロッパに広く分布する *R. farinacea* Ach. に近縁であることを報告している。近年著者らは基準標本を含む日本および台湾産の *R. intermediella* の化学成分を検討し，この種類はホモセッカ酸，セッカ酸，ラマリノール酸を主成分とし付随成分として 4′-O-demethylsekikaic acid, 4′-O-methylnorhomosekikaic acid, 4′-O-metyylnorsekikaic acid 等を含むことを明らかにした。また本種の地衣体は明瞭な皮層と亀裂を生じない軟骨状組織(図1)を皮層の内側に持ち，(14-)16-19×3.5-4 μm の子嚢胞子を生じることも明らかになった。これらの諸形質は太平洋沿岸一帯に広く分布する *R. peruviana* Ach. と形態，化学成分ともに完全に一致するので，*R. intermediella* は *R. peruviana* の異名となることが明らかになった。*R. peruviana* の基準標本はペルーで採集されたものであるが，ペルーでの生育状況に関する報告は全くない。柏谷は1984年に同国を訪れた際，coastal lomas と呼ばれる半砂漠地帯の灌木上に生育する本種を確認した。

□木村陽二郎：**私の植物散歩** 226 pp. 1987. 筑摩書房，東京．¥1,400. 春，夏，秋，冬に分けて，その時期の植物に関する随筆集である。取り上げられた植物は桜，椿，菜の花，アシ，マコモ，ユリ，アヤメなどごく身近なものが多い。これは「小原流挿花」に昭和59年から3年間に亘って執筆したのをまとめたもので，その読者層によるためと思われる。しかし博識な著者のことだから，その内容は古今に渡る書物や現地での見聞を取り入れて植物学者でなければ書けない，興味ある読み物となっている。ひとつだけ気になるのはタヌキノショクダイの発見の経過が不充分なことで，これは阿部近一氏の図を見た津山尚博士が，図はいいかげんなものでなく，熱帯地方に似たものがあって，ヒナノシャクジョウ科の大変珍しい植物だということで問題にされたことから，騒がれ始めたのである。実物の研究は，当時東京大学に内地留学されていた赤沢時之氏が行った。イチョウの精子発見と池野誠一郎氏との関係の経過が不明となっている例もあるので，記録は後の為にも省略せずに記していただきたい。挿入されている図は山田寿雄，水島南平，加納川邦之助氏など主に戦前に活躍されたすぐれた植物画家のものが多く使われている。　　　　(山崎　敬)